
昭和新山「岡本次郎写真集」には続編があった
—1947年のモノクロ写真と1953年のカラー写真—

岡 本 研・横 山 光

昭和新山「岡本次郎写真集」には続編があった* —1947年のモノクロ写真と1953年のカラー写真—

岡 本 研**・横 山 光***

はじめに

2016年11月7日、筆者の一人である岡本 研の実父、岡本次郎（北海道教育大学名誉教授）は死去したが、その数日前に、学生時代に撮影した未公開の昭和新山の3枚の写真の存在を伝えてくれた。また、死去の数ヶ月後、遺品の古いアルバムの中から、昭和新山の57枚のモノクロ写真（ネガ）と、15枚のカラー写真（スライド）が見つかった。

次郎は長らく北海道教育大学旭川校に勤務しており、退職後も旭川市に居住していた。筆者の一人、岡本 研が総会準備委員長を務めた2017年の地学団体研究会第71回旭川総会を前に、その旭川の地で突然この世に現れた貴重な写真群を、岡本が総会でのポスター発表として公表した（岡本 2017）。本論はその発表を基に執筆したものである。

なお、旭川総会のポスター発表の際には「昭和23年のモノクロ写真」としていたが、昭和22年（1947年）のものであったことが判明した（第1図）。ここに訂正する。

昭和新山「岡本次郎写真集」とは

本論のタイトルにある「岡本次郎写真集」について説明したい。

2002年に札幌市で開催された地学団体研究会第56回北海道総会において、北海道支部の特別ポスター展示として、「有珠を愛した男達」が発表された。三松正夫、松浦武四郎、そして岡本次郎の3人が残した絵画や写真を、どの視点から記録したのを探るという内容の三本立ての展示であった。その一本として「昭和新山の

半世紀～岡本次郎撮影、新山生誕直後のカラー写真～」があり（岡本ほか 2002）、そこで紹介した1953年の昭和新山の一連のカラー写真が「岡本次郎写真集」である。

北海道総会の準備を進めていた2000年頃、次郎が1953年撮影の昭和新山の19枚のカラー写真を所有しているという情報が北海道

支部の会員間で話題となり、貴重なカラー写真を基に、49年前と現在の昭和新山を比較し、この50年間の変化を伝えることを目的とした特別展示が企画された。

この企画と前後して、松浦武史郎の残した有珠山周辺の絵画はどの位置から描かれたものか、あるいはその絵画は実際の風景を描いたものであるか、また、地形俯瞰ソフトを用いてそれらが検証できるか、といった企画も北海道支部の有志で形成されていたニュースグループ内で提案され、それらを統合したポスター展示の企画が「有珠を愛した男達」である。次郎本人が作成した当時の写真撮影位置や撮影方向を記載した資料に基づき、2002年春に検証写真の撮影が行われた。ポスター発表後、この研究成果はあらためて地学教育と科学運動に発表された（地徳ほか 2003）。



第1図 1947年撮影の昭和新山の「珊瑚岩」

2018年2月1日受付、2018年4月14日受理。

* 地学団体研究会第71回総会（北海道旭川市）ポスターセッションで発表

** 北海道支部 東海大学札幌教養教育センター 〒005-8601 北海道札幌市南区南沢5条1丁目1-1 kiwamu@tsc.u-tokai.ac.jp

*** 北海道支部 北翔大学 〒069-8511 北海道江別市文京台23 yokh4123@hokusho-u.ac.jp

新たな写真群の発見

今回新たに見つかった写真は前述の通り、57枚のモノクロ写真と、15枚のカラー写真である。これらの写真について述べる。

1947年のモノクロ写真

次郎は東北大学の学生であった1946年夏より現地調査を開始、1948年にかけて研究を行っている（岡本 1995a, 1995b）。次郎によると、生前にその存在を伝えてくれた3枚のモノクロ写真は、1947年に親友の三田亮一氏とともに現地に赴き（三田氏に関しては後述）、調査を行ったときに撮影したものであると証言していた（第2図）。3枚のネガフィルムは画面サイズが54×40mm（実測）の特殊な形状であり、その形状のネガを使用していたのは1947年前後の期間のみであるとのことであった（次郎談）。

死去後に見つかった多数のモノクロ写真群も同形状のネガであり、一部に三田亮一氏が映っていることから、先の3枚のネガと同じく主に1947年に撮影されたものと断定できる。

1953年のカラー写真

遺品のアルバムからは2002年地学団体研究会総会の岡本次郎写真集の“続編”ともいべきカラースライドが新たに15枚見つかり、何枚かのスライドマウントには「1953年7月29日」と日付が書き込まれていた。2002年札幌総会のポスター発表の際の写真集は1953年夏の撮影であることしか確認できなかったが、不明であった正確な撮影の日付も判明した（第3図）。



第2図 岡本次郎（右）と三田亮一氏（左）
湖畔登山道より（1947年撮影）

岡本次郎と昭和新山

次郎は東北大学理学部地理学科で学び、故田中館秀三氏（当時東北大学教授：自然地理）、故八木健三氏（当時東北大学助教授：岩石学）らの指導を受けている。卒業後、同大の副手を経て、1950年に北海道学芸大学（現北海道教育大学）旭川分校の講師となっている。北海道教育大学では地理学（主に人文地理）を専門としていた。

次郎は生成後間もない時期の昭和新山に関する貴重な研究を行い（後述）、写真等の多くの資料を残した人物であるが、昭和新山の研究史の中で岡本次郎の名を目にすることは多くない。これは、次郎は北海道では人文地理学（土地利用等）に研究の方向を定め、昭和新山の研究に関わることはほとんどなかったためである。自身が著した昭和新山に関する学術論文はOkamoto（1949）のみであり、八木・岡本（1947）、八木（1949）、日本地学史編纂委員会（2016）などにおいて、断片的に功績が紹介されている。なお、長い時を経て、1995年に壮瞥町で開催された「昭和新山生成50周年記念国際火山ワークショップ」において、「昭和新山生成直後の地形調査」と題し、昭和新山の最初の科学的な調査研究活動についてのポスター発表を行っている（岡本 1995b）。

写真撮影の背景

次郎は、昭和新山の調査研究に関して1989年の北海



第3図 西側からの昭和新山全景（1953年）

現在の有珠山ロープウェイ乗り場付近からの撮影と思われるが、やや高度が高いようである。当時まだ有珠山ロープウェイはなく“前作”で有珠山山頂から撮影した写真があることから、有珠山に登る途中で撮影したものと思われる。

道教育大学旭川分校での最終講義で詳しく述べており、その内容は自著「旅て来し方（岡本 1995a）」に記録されている。今回公表した1947年のモノクロ写真群を撮影した背景となるので、内容を一部紹介する。

1947年、次郎はまだ本格的な科学的調査研究が多くはなかった昭和新山の地形を、学友の三田亮一氏とともに測量して初めての地形図を作成し、昭和新山の生成メカニズムについての考察を加えOkamoto (1949) を発表した。このときの地形図は昭和新山生成50周年記念誌「麦圃生山（昭和新山生成50周年記念事業実行委員会, 1994）」に紹介されている。

それに先立ち1946年の夏に初の昭和新山の予備的な現地調査（2週間）を行っている。研究課題は「昭和新山生成のメカニズム」、「円頂丘の本体の新しい熔岩（※旧漢字）の発見」の2つであった。

初調査の現地案内は、ミマツダイヤグラムの三松正夫氏である（第4図）。円頂丘の麓には多数の円礫が観察されており、それが山頂にあるかどうかを確認したいと申し出たが、まだ危険な状態であり、三松氏自身も山頂には行っていないとのことで、その際は確認することはできなかった。しかし、現地調査を行っている中で、多数の噴気孔を避けながら歩いていくと頂上に達し、そこで円礫層を発見する。この観察により、田中館（1918）の「大有珠・小有珠は熔岩が火口中にて凝固し、徐々に押し上りたるものなり。火山基底の砂利層を押し上げたは明なり。」という有珠山の形成メカニズムと、昭和新山の形成メカニズムが同じものであることを初めて直接確認するとともに、昭和新山の初の登頂者となった。その後、指導を受けていた北海道大学地質学科の石川俊



第4図 1953年撮影の三松正夫氏のカラー写真
後方に昭和新山が見える。

夫教授に、「あなたは人類最初の昭和新山登頂者ですね」と言われたと懐述している（岡本 1995a）。

新溶岩の発見に関しては、次郎が名付けた「珊瑚岩」（第1図）周辺の岩石を採取して東北大学の八木健三氏に渡したところ、有珠山とは異なる組成を持つ溶岩（紫蘇輝石石英安山岩）であることが確認され、学術雑誌「科学」に八木・岡本（1947）として発表された。この論文で八木は、「…新たに生成した昭和新山の熔岩については未だに明らかにされていない。岡本の採取した標本について、その諸性質を報告し、…昭和新山生成後、その本體には何人とも未だ登ったものはなかったが、1946年8月18日、岡本は円頂丘を南北に走る裂罅^{れつか}に沿って北側から登攀し、遂に頂上に達することに成功した。その表面は高温により焼けた粘土や火山灰によって覆われ、一部には大小多数の円礫が存在する。1ヶ月後の9月19日、岡本は円頂丘の北西側の火口付近にて、新しい熔岩の標本を採集した。」と記述しており、当時の昭和新山の生々しい姿と、次郎の奮闘ぶりを学術論文で伝えてくれている。

1947年のモノクロ写真群は、このような背景で撮影されたものであり、昭和新山の生成を科学的な眼で記録するという意図を持った貴重な写真群であると言える。

学友 三田亮一氏

次郎の昭和新山の調査研究には献身的な協力者がいた。学友の三田亮一氏である（第2図）。「何を論ずるにしてもまだ地形図すら作られていなかったため、まず地形測量を行うことが必要であり、三田氏に頼んで北海道まで来てもらった」とのことである（岡本 1995a）。



第5図 溶岩ドーム南端部を東側斜面より見る
溶岩ドームそのものはほぼ原形を残している
ように見える（左：1947年、右：2017年）。

二人の作業は1ヶ月半にも及んだ。

三田氏は、次郎が測量機器を操作する間、測量ポールを持つ担当であったため長い待ち時間があり、腰を下ろして何十枚というスケッチを描いていた。その貴重な多数のスケッチは前述の「麦圃生山」に紹介されている。三田氏が自身の卒業論文に使用したこのスケッチ群は高い評価を受け、卒業後に海上保安庁水路部の図誌課に就職することとなった。しかし、当時噴火活動を始めた伊豆諸島南部の明神礁の調査のため第五海洋丸に乗り込み、不幸にも1952年9月24日、海底火山の噴火により殉職された。次郎は後に「無二の親友を失った悲しみを

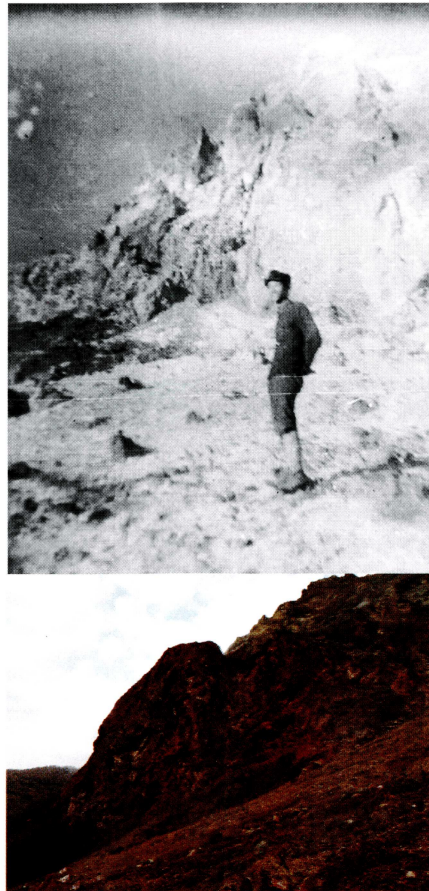
今でも胸の奥に抱えている」と語っている（岡本1995a）。

現地調査

2017年10月31日、発見された写真と現在の状況の比較を試みるべく、昭和新山の現地調査を行った。その結果、ある程度はどの位置から撮影された写真であるかを特定することができ、意外にも生成直後と現在の地形には大きな変化がない部分が多いことに驚くと同時に（第5図）、写真と同じ角度からの撮影が樹木に阻まれて不可能であるなど、年月を感じさせられることも多かった。



第6図 「智恵子合唱 Dome山頂」とメモ書きのあるカラーライド
上段は1953年当時のもので、中段はその場所と推定される再現写真。下段は合唱を行っていたと推定される位置（Google Map）。



第7図 珊瑚岩の前に立つ次郎
現在は基部しか残っていない（上：1947年，下：2017年）。



第8図 山腹の「地層」
この2枚は別のものである可能性がある。撮影角度も異なっているが、明瞭な地層の様子が酷似していることから比較してみた。再現写真は北側中腹である（上：1947年，下：2017年）。



第9図 斜面に立つ三田氏
地形はかなり崩壊しているが、山頂やや下の東斜面、「智恵子合唱」の場所の南側の撮影であると推定した（上：1947年，下：2017年）。



第10図 頂上から見た南側のもう一つのピーク
当時は内部の地層がはっきり見えていたようである（上：1947年，下：2017年）。



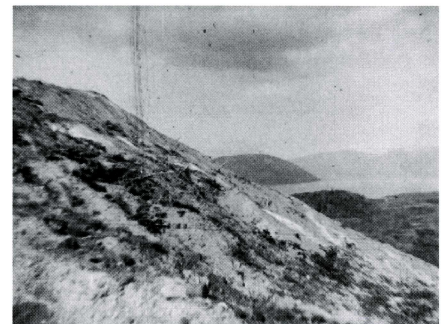
第11図 東側から見た溶岩ドーム
現在は、撮影した位置は樹木が茂っているが、ドームは原形をとどめている（上：1947年，下：2017年）。



第12図 北東から見た溶岩ドーム
ここも樹木に覆われている（上：1947年，下：2017年）。

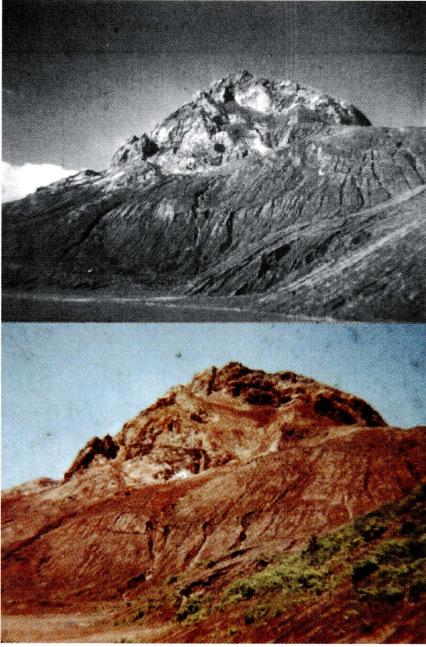


第13図 「第7火口内」のメモがある写真
第7火口は1944年10月1日にできたもので富士山型をしていいたい（三松 1962）智恵子合唱の場所のやや上方である（上：1953年，下：2017年）。

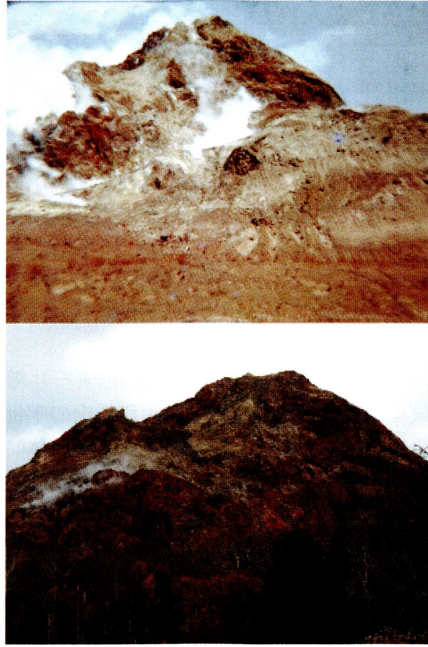


第14図 亀岩付近から見た洞爺湖
現在はかなり山頂に近いところでも草本の植生が進んできている（上：1947年，下：2017年）。

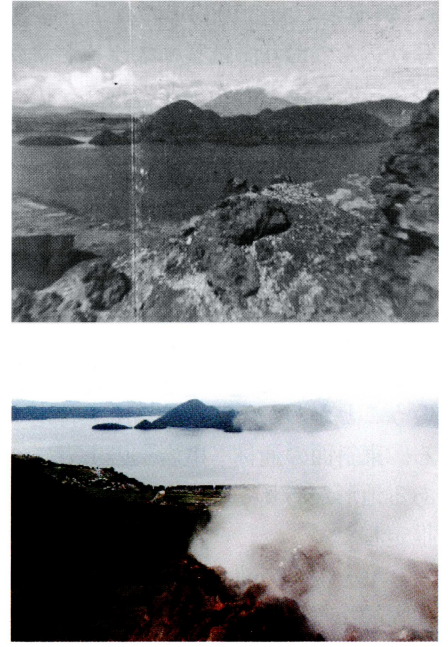




第15図 唯一1947年と1953年で同じ位置(南西側)から撮影された昭和山。地形はほぼ同じであるが、6年間で植生が進んできていることがわかる(上:1947年,下:1953年)。



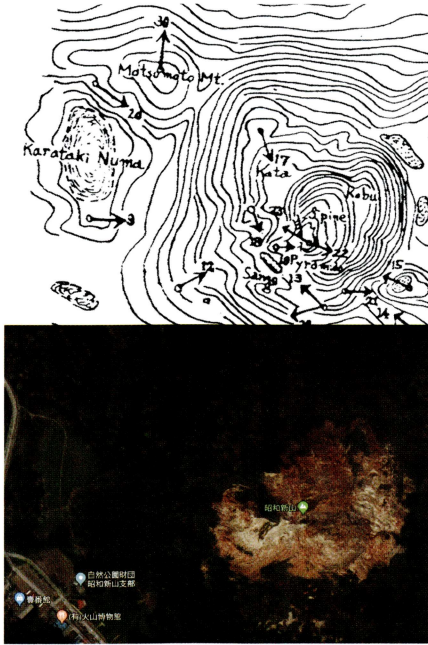
第16図 西側から見た昭和山全景。噴気活動に差が見られる(上:1953年,下:2017年)。



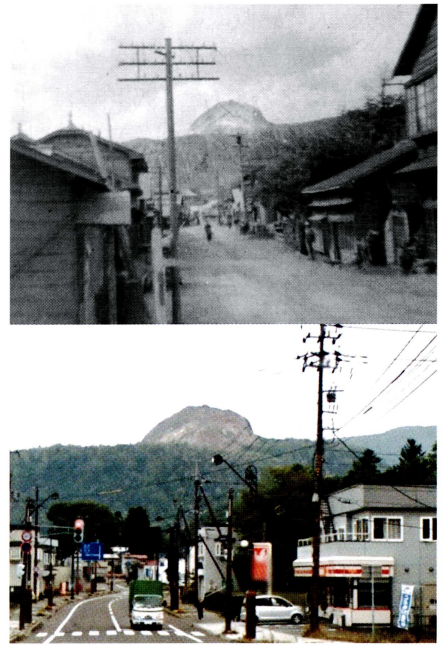
第17図 山頂付近北側から洞爺湖を望む。再現写真は2002年調査時の写真である(上:1947年,下:2002年)。



第18図 「沼」とメモがある1947年の写真。山の麓に見える沼は、風景より、新山沼ではなく、Okamoto(1949)の地形図の新山西方に描かれている「Karataki Numa(第19図)」と推定した(上:1947年,下:Google Map)。



第19図 Okamoto(1949)の地形図の一部及び現在の空中写真。西側にKarataki Numaが描かれている。下はGoogle Mapによる現在の様子。カラタキ沼のあった場所は現在は草地になっている。



第20図 壮警町市街地から見た昭和山。概形としては変わらぬ姿を見せている(上:1947年,下:Google Map)。

“続編”である1953年のカラー写真には多数の人物が写り込んでおり、紙製のスライドマウントにはどの方向から撮影したものか、どのような状況で撮影したものかなどの、いくつかメモ書きがあり、これらの記録も「再現写真」の撮影には大いに役立った。

例えば、第6図の写真のスライドマウントには「智恵子合唱Dome山頂」と書き込みがあった。昭和新山の山頂付近で合唱を行うような場所があったということである。女性が前に立ち、数名の人物が向き合った写真から、智恵子という女性が指揮者となり、合唱を行っていたということがわかる。この場所を特定すべく探索したところ、東斜面の通称“亀岩”の上方にゆるやかなへこみのある地形があり、ここがその合唱を行った場所であると推定した。

写真をすべて紹介することはできないが、いくつかの代表的な写真を現地での写真と比較して紹介する（第6～20図）。

おわりに

今回の調査は、次郎の死去まだ1年後の時期であり、また、次郎が親友の三田亮一氏とともに調査研究を行っていたときの70年近くも前の時空を超えた写真の追想であり、大変感慨深いものがあった。古いカラースライド写真を最新のデジタルカメラで撮り直した際、ディスプレイにはまるで今、1953年の昭和新山を見ているかのような錯覚に陥るほど美しい風景が映ったのだった。

文 献

- 地徳 力・新井田清信・川村信人・岡本 研・石井彰洋（2003）有珠を愛した男たち—武四郎・次郎・愛山の残したもの—。地学教育と科学運動, 42, 35-44.
- 北海道地理教育研究会（2017）地理教育の未来を拓く—北海道地理教育研究会50周年記念誌—。北海道地理教育研究会, 60p.
- 三松正夫（1962）昭和新山生成日記。昭和新山生成50周年記念国際火山ワークショップ実行委員会, 三松正夫記念館, 225p.
- 岡本 研・石井彰洋・新井田清信・地徳 力・川村信人（2002）昭和新山の半世紀—岡本次郎撮影・新山誕生直後のカラー写真—。地学団体研究会第56回北海道総会講演要旨, 187-190.
- 日本地学史編纂委員会（2016）戦後日本の地学（昭和20年～昭和40年）。東京地学協会, 地学雑誌, 125（2）, 269-290.
- Okamoto Z（1949）Morphological Note on the New Mountain, Syowa-Sinzan, Usu Volcano, Hokkaido, Japan. Annals of the Tohoku Geographical Association, 2, No.1, 20-25.
- 岡本次郎（1995a）旅て来し方—地理学と地理教育をめぐって—。北海道地理教育研究会, 171p.
- 岡本次郎（1995b）昭和新山生成直後の地形調査。昭和新山生成50周年記念国際火山ワークショップ小論文・要旨集, 149p.
- 昭和新山生成50周年記念事業実行委員会（1994）昭和新山生成50周年記念写真集「麦圃生山」, 112p.
- 田中館秀三（1918）有珠山頂丘。地質学雑誌, 25, 164-177.
- 八木健三（1949）有珠火山昭和新山の岩石学的研究。日本鉱物科学会, 岩石鉱物鉱床学会誌, 33, 3-17.
- 八木健三・岡本次郎（1947）有珠火山昭和新山の熔岩。科学, 17, 324-326.